
失われし国

鮫島大吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失われし国

【Zコード】

Z7959E

【作者名】

鮫島大吉

【あらすじ】

ある新聞記者の故郷での異変を同窓会の席で感じ調査を始めて行くと、ある種個人単位では無い國家レベルへと発展していた。知らない間に我々の国は乗っ取られているのでは無いのか？。

これは俺の友人より届いた手紙 がすべての始まりだつた。

俺の友人、彼の名前は内田慎一郎（35）幼い頃からの数少ない友人の1人であり、俺の誇りでもある。

彼と俺は中学では新聞部に所属し、将来の夢は一流のジャーナリストとして活躍する事だつた。

そんな彼は一流大学に進み一流の新聞社で活躍する、まさに夢を現実にしたのだつた。

一方の俺は、三流大学をよつやく卒業し地方紙の記者になんとか収まっている程度だ、だから尚更彼は俺の誇りでもあつた。

そんな彼から突然の手紙に俺も当初は、今時に手紙とは随分奥ゆかしい、メールでも良いのではと思った位だつたが、それは直ぐに理解出来たのだつた。

疑惑

手紙の出だしは意味深なものだつた。

拝啓、元気ですか？この手紙を書いている私は、読まれている頃は姿を消しているかも知れない。

それは自らの意思では無く、第二者の手によるものだらう。

これはまだ推測にしか無いのだが、こここの所、誰かに後を付けられている気がしてならない。

そしてこれも、推測の域を脱し無いのだが、郵便物やごみ箱を調べられているように思える節が有るのだ。

それは、私が今調査している事柄に関係しているのかも知れない。

事の始まりはこうだ、6年前の事だったか？

小学校卒業生の同窓会を行います。

と連絡が届き都内の某ホテルに行つた時の事だった。

23年ぶりに会う友人達に心躍らされてホテルに向かったのだが、結果は意外なものだった。

幹事であつたはずの木村昌宏の姿は無く、とは言つても23年ぶり会うのだから直ぐには分かるとは思わなかつたが、しかし、異様な事に同じクラスメイトたちには誰一人として会う事も無く、違うクラスだつたと言う人達にしか会わなかつたのだ。しかも、その人達は私の事を良く知つているのだが、私には誰一人として思い出せないのだ。

共通の話題は先生達の名前や駄菓子屋の話題と、一致している部分も有るのだが、何故だかしつくり来ないものがあつた。

その後から今の異常な事は始まつた気がする。

ここまで話で、俺は手紙から目を外した。

自分でも気が付かずにいたのだ、彼とは幼なじみのつもりだつたが、彼は石川県のS町と言つ漁師町から中学校の時に転校して來たのだった事を思い出した。

俺は再び手紙に目を向けた。

どうやら推測は確信になつたようだ。

郵便物を取り出す所にトラップを仕掛けて置いたのだ、多分犯人は手にケガをした筈だ。

しかし、いったい何の目的があるのかは今だに理解出来ないでいた。

そんな矢先に同窓会の幹事だつた木村昌宏から連絡が入り、私は木村と会う事にした。今は埼玉県北部のM市に住んでいと言う木村の都合上、待ち合わせは秋葉原の電気街。

とは言つても、今や電気街だけでは無いサブカルチャーの発信基地とも言える街になつてゐる。

そんな一角のこじんまりとした喫茶店で私は木村を待つた。

待ち合わせの時間より1時間も早く着いた私は、コーヒーを注文し窓の外に目を向けた。

外はと言つと、日差しはすでに夏本番を思わせるほどの強さを道行く人達に浴びせ、日陰はサラリーマンの休憩所と化している。

そんな中、かすかに見覚えの有る様な顔が近づいて来るのが見えた、とその瞬間に、彼の姿は私の視界から消えた。

しかし、私は彼との待ち合わせ時間もまだあるので余り気にせずにコーヒーをすすりのんびりとしていた。

それからどれ位過ぎただろう?

待ち合わせ時間も過ぎた頃、私に一抹の不安がよぎつた。

さつき私が見たのは、もしかしたら本当に木村だったのでは無いだらうか？

だとすると、あの後、何処へ消えてしまったのだろう。

私は「一ヒーを飲み干し席を立とうとした時、店員が声を掛けて來た。

私は電話だと店員の言葉に促され受話器を取つた。

電話の向ひ側の声は木村と名乗つたのだ。

「今日は悪かった急用が出来たので帰らせてもらひた」と言つのだ、私は先日、待ち合わせの約束をした時の木村の声を思い出せないでいた。

確かにそうかと言われると自信が無いのだが、自信の無さが変えつて不安を搔き立てた。

不安は解消しないままこの日は終わつた。

後日、私は不安を拭いきれないまま、木村の自宅を訪ねる事にした。

埼玉県の北部のこの町は郊外のわりには近所付き合いが無いのか、捜すのにかなり苦労した。

ようやくの思いで見つけた時には、すでに陽が傾き始めていた。

それ程大きくない建物は、南側に大きく茂つた櫻の木のせいで日陰になつてゐる為に、部屋は暗そうに見える。

私は、二階建てエレベーター無しの賃貸マンションで、木村の部屋を捜した。

事前に連絡しないことで、隠され無い生活が見えると予想して来たのだったが、予想は大きく裏切られた。

なぜならそこには、生活の実体が無いガランとした部屋に電話とソファーべットが有るだけの部屋だったのだ。

そこはまるで住居と言つより、事務所?いや、アジトとともに言える様子だ。

何人かの食べ残したと思われる「ゴミ」が散乱し、簡易的なガスコンロが有る部屋だった。

私は部屋を探索した。

普通に言えば2DK程の部屋も家具が無いと随分と広く感じる。

はたしてここが本当に木村の家なのだろうか?

私は彼の痕跡を捜した。

すると、電話機の下に一冊のノートを見つけたそこには、以前、取材き込まれたハングル文字が並んでいた。

私はその中の一編に目を奪われたのだった、そこには、以前、取材先の韓国料理店で、参考の為に自分の名前をハングル文字に書いてもらつた事があつたのだ。

その文字が目の前に書き込まれている。

その現実に自分で理解出来ないでいた。

しばらく眺めていた時に車の止まる音がし、人が近づいて来るのがわかつた、私は、直感的にこの部屋の住人だと察知した。

すぐさま、ノートを元の場所に置き、一番奥の押入に隠れたのだった。

しばらくすると、ドアが開き人が入つて来るのがわかつた。

その人間は、ガサガサとビニール袋を探つている音をたて、私の存在には気付いていない様子だ。

少しすると、電話を掛ける音がした、私は耳を壁に押し付け、電話の内容に耳を傾けた。

すると、またしてもハングルらしき言葉が聞こえて来たのだった。

やや甲高い声は聞き覚えが有るような気がしたが、自分でも定かでは無い。

私はしばらく様子を伺う事にした、そういうしている間に、うかつにも眠つてしまつた私が、気付いた時には時計は零時を過ぎていた。

私は不安になつて來た、住人はどうしているのだろう?
私のしている事は今のところ犯罪では無いのだろうか?
色々な言葉が頭をかすめたのだった。

私は勇気を振り絞り押入の扉を開いた、静まり返つてゐる部屋に、

私の息遣いがやけに大きく聞こえる。

忍び足にやけに力が入ってしまい余計にぎこちなく感じ、額は汗が流れているのがわかつた。

暗闇の中につつすらと人影らしき物が浮かんで、私は息を呑みやつとの思いでドアにたどり着いた。

内力ギギを外しドアノブに手を掛けた時、背後の人影を感じた。

私は振り返る事も出来ず、ドアを開け、有るつたけの力でその場を立ち去つた。

いつたい何処をどうやつて来たのかも解らなかつた。

いつの間にか幹線道路に立つていた私は、タクシーを拾い自モヘと帰つたのだった。

ここまで読んで俺は事件性を感じずにはいられなかつた。

意図的に仕組まれた巧妙な罠を仕掛けられて、それに、まんまと乗せられて行つたように思えて成らなかつたからだ。

郵便物の件、待ち合わせの件、アジトらしき部屋の件、全ては偶然では無く仕組まれた事に思えた。

俺は考えていた、これはほんの一的部分なのでは無いだろか、まだ気が付かない所では、もっと大きな事が起きていくような気がして成らなかつた。

それは、その先を読み明らかになつて行つたのだ。

私は自宅に帰つてからも、あの恐怖心のような何とも言えない思いに襲われていた。

私自身、今まで色々な場面に遭遇して来たので、わりと度胸は有るつもりでいた、しかし、今回はさすがにきわどい。

いつそのこと警察へ届けようか？しかし、それはジャーナリストとしてのプライドが許そつとしなかつた。

私は、この後も探る決意をした。

何日立つていた頃だらう、私はいつものように取材を終えて、社へと向かう車中から何気なく向けた視線の先に、秋葉原で待ち合わせしていた時に見かけた、木村に似た容姿の男と思われる男が、右手に包帯をした格好で雑居ビルへと入つて行くのを見かけた。

私は、車を止めそのビルへと向かつた。

入口には、これと言つた特徴も無い建物のわりには、防犯カメラが曲がり角に数台取り付けて有る。

まさに異様と言つた雰囲氣だった。

私はなるべく、カメラの死角に入つて歩いたがあの男の後を追うとなるとどうしても映つてしまつ、そんな時だつた、階段脇のトイレの中から水を流す音が聞こえ、私は身体を隠した。

隠れると同時にトイレから出でたのは、白衣を着た男だつた。

先ほどの男では無かつたが、何か引っ掛けかる物がある、私は後を追

う事にした。

後を追つた私が見た物は、美容整形外科の看板の掛かったフロアだつた。

そのフロアに立つた私は、白衣の男の先に例の男がいることに気付いた。

右手の包帯が、顔を見なくとも流石にわかつた。どうやら、男は気付いていない様子だつた、白衣の男は近づいて、診療室らしき部屋に男を引き入れた。

その場に残された私は、カメラの死角を選んで部屋の様子をうかがつた。

残念ながら、中の音すら聞こえて来ない。

私は考えた、あの男は手の治療に来たのか？それとも別の件で訪れたのか？

私は、とりあえず引き上げる事にした。

このままいても進展が無いと思ったからだ。車へと戻つた私は、あの男がここに居ると言つ事は、木村の部屋は誰もいないかも知れないと思い、車を走らせる事にした。

走りながら考えていた、秋葉原で待ち合わせした時の木村と思しき人間は手に包帯をしていなかつたように思える。

しかし、あれが木村と断定も出来無い、仮にそうであつた場合の彼はどうなつてているのだろう。

そうこう考えていたら、基本的な事を忘れていた事に気が付いた。そもそも同窓会の知らせがあつた時の木村の連絡先を登録してあつたのでは無いか? という事、ずっと待っている状態だった事ですつかり忘れていた。

私は車を安全な場所に停車してアドレスを探しバックをあさつている時、後方に車が停車し男が2人近づいて来た。

男たちを見て直ぐに違和感を感じた私は、即座に車を発進させた。直感は当たつていたらしく、男達は車へと戻り後を追う様子だったが、一瞬先に発進した私は彼らを巻く事が出来た。

私はバックを探るのを後回しにして、例のマンションへと向かつた。

それは、いつ又彼らがやつて来るか気が気でなかつたからだ、仮に彼ら以外にも追つ手がいたとすればと考えたうえでの事だった。

夜中はさすがに交通量が少なく瞬く間に到着した気がした。

相変わらず大きく茂つた櫻に月明かりさえも遮られ、辺りは暗く静まり返つてゐる。駐車場とは反対側の道路に車を止め辺りをうかがつた、幸いに先ほどの奴らの姿は無いようだつた。

私はあの病院から彼らが着けていたとは思いにくかつた、だとしたらどこから着けていたのだろう、取材を終えた時にはすでに着けられていた、あるいはその前から。

私は考えを巡らせたが答えは出そうになかった。

私は木村の部屋を外から確認した、時間は深夜を回っている為、辺りの部屋は電灯もほとんど消えていた。

そんな中の木村の部屋も灯りはない、室内は誰もいないせいなのか、あるいは息を潜めているのか判らないが、私は覚悟を決め部屋へと向かった。

部屋は前回と同様に扉に鍵は掛かってなく容易に侵入出来た。

それは安易に、侵入しやすくさせているのかもしれない。

ただ、こうなつたら奴らの術中にはまつてやるつもりだった。

室内は私の予想通りに、誰もいない、そして相変わらず殺風景なままだつた、私は何か手掛かりになる物が無いかと、ひと通りに部屋を回つて見たが、先日の名簿らしき物以外には目立つた物は無かつた。

私はその名簿らしき物を取り、もう一度確認した。

自分の名前のページをめぐり、前回との違つた所に気が付いた、赤いペンで丸く囲んでいたのだ。

よく見ると同様に別の名前も書き込んであつた、しかもそれらにはばつ印が書き込まれていて、その他には印の無い名前もあつた。その名簿の中の文字全てをカメラに収めた、そして再度見直していくと、数字が書き込んである事に気が付いた。

私の名前の所を見ると住所番地と生年月日が一致していた、と言う事は別の数字も番地の可能性があるのでは、そう確信した私は社の資料室へ向かった。

資料室へ向かう間も気が休まる事が出来ずについた。

たどり着いた時には疲れきっていたのだった。

その疲れきった身体をようやくのおもいで資料室へと運び入れた、そしてハングル語の辞書を開きカメラの文字と照らし合わせた。

そして自分の生年月日に近く記されている所から調べていった。すると、これは喜ぶべき事では無いが、予想通りの名前が浮かび上がった。

それはやはり、木村の名前だったのだ、しかもその名前にはばつ印がされている、そして家族だったのか続いて女性の名前、さらに、続いて最近に流行りの子供らしき名前が、同じ様にばつ印がされていた、それは、何を意味しているのか想像するのが恐かつた。

予想していた事とは言え愕然とした。

本人だけならまだしも、家族までがと思うとさすがに気が滅入った。

私は、この件を記事にして行く決意をした。

この謎めいた事柄を世間に公表して、他にも同様な事例に悩んでいる人がいればと思っての事だった。

そして、何らかの手掛かりを得ることが出来るのではと思っていたのだった。

翌日、早速記事にするべく、これ迄の事柄を整理した粗刷りを、デスクに放り込んで、その日の取材へと向かった。

故郷からの情報収集が近道だと感じた私は、石川県へと向かつた。

普段は車にするのだが、先日の件も有るので、飛行機で行く事にした。

羽田を出る時には暖かく感じた陽気も、北陸はまだまだ初夏には程遠い感じだ。

空港に着いた私はレンタカーを借りた、やはり移動範囲が広がり、時間の短縮に成るからだ。

空港からフエリー港へと向かう途中の書店で地図を買った。

故郷と言つだけで、記憶はあまり無いのが本当のことりだつた。フェリーを降りて、ほんのりと残る記憶の中から一番最初に向かつたのは学校だつた、とりあえず思い出は一番詰まつていた場所だからだ。

最近の学校はセキュリティーの問題から、突然の訪問者を敬遠しているようだが、ここに於いてはその心配は無用のよつだ。

建物は建て変えられていたのだが、所どころに懐かしさを感じさせていた。

あいつの家は頻繁に通つたのでよく覚えている。
校庭の隅の所に立つてゐる桜の木に彫刻した文字は、当時に一番仲の良かつた 川野勲と一緒に彫つたものだ。

予定を変えそちらへ向かつた、当時の私達の田線からすると大きく見えていた道路なども、今見るとたほどでも無い事に驚かされる。

あいつの家は頻繁に通つたのでよく覚えている。

ほどなく彼の家へ着いた、以前と変わった感じは無く安心して入つて行つた私は、取材を忘れていた。

垣根の間から中庭が見えている、開き戸を開け庭へと進むと玄関にたどり着く、呼び鈴を押すと中から明るい声が聞こえて来る、そう期待していたのだが、現実には物静かな容姿の60代前半位と思える女性が姿を表した。

私は家を間違えたかと思った瞬間に、女性は声をかけて來た。

「内田さんね」と声を掛けられて啞然としていた、何故なら、20何年かぶりの自分を覚えているものだろうかと言う事、それから、当時は下の名前でしか呼ばれていなかつたので、直ぐには反応が出来ないでいたのだ。

私の中の記憶を辿つてみたが、名字で呼ばれていた覚えが無い、そういうこつしている内に奥から見覚えが有るような、自分でも断定出来ない男性が出てきた。

彼は笑顔で近づいて來る、まるで私が來る事を予測していたかのようだに、その彼に、私も笑顔で返した。

「しばらくじゃないか」そう言つて近づいて來る彼に悪意は感じなかつた。

そもそも私が、神経質に成りすぎているのかも知れない、しばらくぶりの故郷に戸惑つてゐるのだと、直ちに言い聞かせるのだった。

私は直ぐに同窓会の件を切り出した、すると一瞬、彼の顔が曇つた。

「ああ、親父の葬儀やなんやかんやと忙しかつたから」と応えた。

そういえば、両親とも彼の家は教師をしていたはずだった、覚えていの限りでは細身のきやしゃな体つきで病的な感じはしていた気がする。

私は、それ以上その件には触れ無い事にした。

何故なら彼がやう言つて居るような気がしたからだつた。

独身の私が聞くのもおかしな話だが、結婚はと尋ねてみたが「こんな田舎に来る人いなかから」とかわされた感じがした。

ひとしきり話した後、私は先を急ぐと告げると

彼は
「じゃあ、その先の公園まで送るよ」と言つた彼に母親の目が鋭く光つた。

しかし彼はそれを遮るように私を急がせた。

彼は私を母親のいない場所へと誘い出した様子に、素直に従つた。玄関先から私達の姿が見えなくなるまで見送つていた彼女に違和感を抱きながら歩いた。

彼は歩きながらこう言つた。

「悪いがそのままの状態で聞いてくれ」そう言つと、続けて言つた。

「詳しい事は今言え無いが、この街はとんでもない事になつていて、公共的施設も例外じゃ無い」と言い終わると再び周囲を気にして続けた。

「お前の仕事はジャーナリストだつたよな？」

私は頷いた。

「だつたらこの街の事、今起きている事を取り上げて欲しい、助けて欲しいんだ」と言い辺りを見た。

公園の砂場に何組かの幼児と母親の姿、それに混じつて老人と言うには早すぎる位の初老の男性が犬を散歩させている。

すると、茂みが一瞬揺れた、その先に居たのは彼の母親の姿だつた。

私達は気付かぬ振りをしてその場を通り過ぎた。

彼は私に向かい

「くれぐれも慎重に後の事は任せた」そう告げると私の前から去つて行つた。

私は自分の身辺に起つてゐる事を調査する為に此処に来た筈だつたが、これはかなり大事だと覚悟を決めた。

私はその場を離れ学校へと戻つた、その途中もさつきの事が頭から離れないでいた。

彼の訴えたかつた事は？母親の様子といづれにしてもインパクトは大きかつた。

そのいづれの事も、今回の私に起つてゐる事は何かしらの関連性が有るよつに思えた。

学校へと着いた私はそのまま職員室へ向かつた

20数年の間なら誰かしら知つた教員がいても良いと思えたからだ。

しかし、その期待は裏切られた、ここにも少子化の波は影響してい

るようで、教員の数は激減していたのだ。

聞くところによると近隣の町へ赴任していたり教師そのものを辞めたりとさもざまだった。

私は大事な手掛けりを失った気がした。

私は卒業アルバムを閲覧させて貰い、当時の記憶を呼び覚まさうと試みた。

友達の多く無い私だがいくらかの足しには成るだろとページをめくつて我が眼を疑つた。

卒業アルバムは古さを感じるようで妙に新しく中身を見て更に驚いた。

自分の姿が写つていなかつたのだ、直ぐさま名前の場所を探してみると、そこには見ず知らずの人物が写つているのだった。

これは、明らかに情報操作させていると確信した、何故？自分だけかと思つたがクラスメイトにも操作させているようだつた。

私は学校を出た、そして駐在所のあつたはずの通学路の所へ急いだ。そこに駐在所はあつた、ことごとく裏切られて来た為に少々疑心暗鬼になつていた私は胸をなで下ろした。

事件性と言うのかこの一大事を放つておける筈がない、ここは普通で有つてくれと祈る思いだつた。

庭先の洗濯した物の中に、子供の物が有る事にやや安堵感を感じ、思い切つて訪ねる事にした。

応対に出てきたのは洗濯物の主の母親だらうか、といつよりも駐在

所警官の妻であつた女性は明るめの笑顔で応対してくれた。

私は警官に用があると告げると、あいにく出掛けていると言つて、

帰りを待つには時間が有る、考えた末に諦めると云ふて駐在所を出た。

「なんてついてないのだろう、頼りの綱の警察も奥さんじゃあな」と自分をなぐさめるような独り言を言つて駐在所を去了。

行く宛の無くなつた私は、いつの間にか先ほどの公園まで来ていた。

車を脇に寄せてこの後の事を考えていた時、ルームミラーにパトカーが写つた

「こんな所へ来ていたのか」

と外へ出た時、傍らに居たのは川野の母親だった。

私は近づくのを躊躇した。

すると彼女は私に気付き私の方向を指さしたのだった。

とつさに異変を感じ車へ戻つた、ルームミラー越しに状況を把握しよつとしたが、警官は歩いて近づいて来る。

「何故? 彼女は私を売る様な真似をするのだ」と問い合わせても答えが出そうにない、ここは何気なく立ち去つた感じを印象づけるべくゆつくりと車を発進させた。

すると警官は、ぐるりと身体を返しパトカーへと向かつた、それを確認した私はよつやくアクセルを上げその場を去つた。

何故かその場を去った私は、自分の直感でここに居ては危険だと判断したのだった。

こうなつて来ると全てが疑わしく思えて来て、私は、この町を離れる事にした。

レンタカーを返し空港内から社へ連絡した、これまでの事をかいつまんで説明したのだったが理解されたのかどうかはわからない。

私は今から帰る事を告げ、デスクに置いた荒刷りを編集長に見せ、本刷りの許可を貰える様に指示して電話を切った。

飛行機に乗つても今日の件が頭から離れなかつた。

機内で改めて原稿を読み返して見た、同窓会での見覚えの無い同級生たち、幹事であつた筈の友人の失踪、その友人に成りますがごとくの人物の存在とそれを援助している団体。

その追跡を阻止しようとする組織とこれまでの事だけでも充分異常な出来事だつた。

それに加え今回の件で、決定的と言えると私は判断していた。

やがて飛行機は羽田へ到着した。

一刻も速く原稿にしたい私は、社へと急いだ。

社へと到着した私は、デスクへ向かい少々の手直しと追加した内容の編集をしていた時、編集長への繋ぎを取つてくれていた後輩の乾が声を掛けて來た。

「原稿の掲載にストップが掛かりました」と乾の口からこぼれた言葉を疑つた。

私は、どう言つ事かと問い合わせたが、彼の反応は曖昧なままだつた。私は、そのまま上司で有る編集長の所へ行き、事の真意を聞いたのだったが、

「私にも良くわからんのだ、ただ上からの通達だ」としか答えなかつたのだ。

こゝまでも圧力が掛かっているのかと思つてゾッとしていた。

いつたいどれほどの力を持つてゐるのだろうか、考えていた時に電話が鳴つた。

相手は警察からだつた。

私のマンションの部屋が不審火により全焼したと言つ事だつたが、有る意味あまり驚かなかつた。

こんな時には、家族がいると心強いものなのだろうが、かえつて心配しないで良い分、気楽なのかもしれないと思つた。

マンションは通勤を考えて、わりと近くにしていたので、わけなく到着した。

帰つても殆ど寝るだけの空間はさほどの荷物が有る訳でもなく、家具の一揃えにダンボール十数個に收まる程度の衣類が有るのだったが、さすがに仕事柄、書籍類は豊富にあつた。

到着すると直ぐに、私よりも若いであろうと思われる警官が事情聴

取に来た。

「消防の見解によると灯油の様な物を撒いた後に火を付けた形跡があるそうですが、何か心当たりは？」と尋ねられたが、その様な物を買った覚えも無かつたし、明らかに彼らの仕業としか言え無かつた。

若い警官は私の反応を訝しげに見ていたが、これまでの経緯を話すつもりは無かつた。

話した所で、また揉み消しに合つては意味が無いと思つたからだつた。

私は更に覚悟した、どこまでたどり着けるか解らないが、徹底的に調べてやる、悪いがお前も協力してほしい。

生きていられるかの保証は無いが、もし、生きていれたら、お前と私がよく夢を語り合つた場所へと来てほしい、今から半年後の10月10日の正午に会うことしよう。

この手紙を受けてから5ヶ月、俺は俺なりに調査しているが、解らないが事だらけだったが、数日前から俺の回りでも奇妙な事が起り始めている。

あいつとの約束の日が近づいている。

俺も自分の身の危険を誰かに伝えておくべきなのだろうが、これとか疑問だ、きっとあいつも同じように思つていたに違いない。

だから俺も、覚悟を決めた、この手紙を読んでいるお前にお願ひだ、

けつして奴らを侮るな、直ぐ近くにも奴らまじる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7959e/>

失われし国

2011年1月20日03時51分発行